台大日本語文研究第 37 期
2019 年 6 月，頁 19-38
2019-03-31 收稿，2019-05-29 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 201906_(37).0002

抵抗的形態：論久生十蘭的《母子圖》

林淑丹*

摘要

久生十蘭是一位複雜幻化多端卻富內涵的作家，他的作品經常自由自在地遊走各種題旨和技巧之間。《母子圖》是他的代表作之一，故此這部作品也內含許多手法高妙難以概念化的技巧。縱使具有如此鮮明的特色，以往有關久生十蘭的評論，大多停留在標示他是一位小說魔術師，對於他的作品的精神和深度研究仍然十分缺乏。

本篇論文企求以嶄新的觀點研析作品，不侷限在分析例舉久生十蘭的創作技巧，更聚焦在探究其代表作《母子圖》所蘊含特殊訊息與線索。尤其著重在探究主角和泉太郎的戰爭記憶之再現，亦即經過沉澱後的印象，加上主觀意識和感受的重行表達，融合了文化記憶和倫理思維制約的敘述。在故事裡，和泉太郎在精神發育上尚未成熟，卻經歷目睹了戰場上的暴力、殺戮等殘酷行為，其心靈的創傷在停戰後，和泉太郎並未能在精神上重獲得自由。在大角度上，本篇論文從戰爭記憶的傷痕之再現著墨，把戰爭記憶所及的生與死，透過主角的複雜感受點出幻化其實是多元、多層次的文化和倫理思維的反射。

關鍵詞：戰爭、記憶、戰爭孤兒、創傷、塞班

* 文藻外語大學日本語文系教授兼系主任

臺灣大學學術期刊資料庫

Means of Resistance: Hisao Juran's *Boshizo*

LIN Shutan*

Abstract

Hisao Juran is a complicated and fantastic writer though rich in contents and implications. His writings often traverse freely among various topics and techniques. *Boshizo* is one such representative works. In this novel, there are many skillful techniques that are hard to conceptualize. Most previous studies on Hisao Juran, however, routinely treat him as a magician of novels.

This paper aims to apply a brand-new standpoint to deal with Hisao Juran's creative techniques in *Boshizo*. There will be particular attention to the re-presentation of Izumi Taro's memories of war focusing on the rhetoric of impressions and the persona's subjective consciousness and feelings in light of cultural memories and the narration of ethical thinking. Taro not being spiritually matured, nevertheless, has experienced and witnessed violence. His psychic trauma, even after the war, does not give him spiritual freedom. This paper will address the life and death feelings of the protagonist implicated by war memories.

Key words: War, Memory, World war II orphan, trauma, Saipan

* Professor and Chairperson of Japanese Department, Wenzao Ursuline University of Languages

臺灣大學學術期刊資料庫

抵抗のかたち——久生十蘭『母子像』

林淑丹*

要旨

久生十蘭は多彩なジャンル、文体、技巧を変幻自在に駆使する作家である。『母子像』は彼の代表作のひとつで、この小説には高度な技巧が仕組まれている。久生十蘭の作品には鮮明な特色があるにもかかわらず、従来の研究では、十蘭は小説の魔術師だという評価にとどまっていた。作品についてのさらなる研究はまだ手薄だと言える。

本稿では、十蘭の創作技巧にとどまらず、斬新な視点から作品を分析したい。具体的には、『母子像』の作品世界に内包されるメッセージに焦点をあてて追究したい。とりわけ、主人公和泉太郎の戦争の記憶はいかに再現されているのか、に着目して究明する予定である。無意識下に沈んだ太郎の戦争の記憶は、戦後不幸な形で再演される。そのなかには文化的要素と倫理的な制約が含まれている。作中、太郎は精神的に発達途上でありながら、戦場での暴力、殺人などの残虐行為を目撃し体験した。終戦後も戦争から自由になることはできなかった。広い視点から言えば、ここでは、物語で再現される戦争記憶の傷痕、および生と死にかかわる戦争の記憶がいかに継承されたかを探求したい。

キーワード：戦争、記憶、戦災孤児、トラウマ、サイパン

* 文藻外語大学日本語学科教授・学科主任

臺灣人學學術期刊資料庫

抵抗のかたち——久生十蘭『母子像』

林淑丹

一、はじめに

久生十蘭（1902-1957）は、現代小説、とくに推理小説、歴史小説、翻訳など多面的に活躍した作家である。彼は博識で多才な人物で、小説の技法において非常に優れていた。また、作品の傾向は変貌を重ねた。澁澤龍彦は、「フィクションとしての小説というものが、無から有を生ぜしめる一種の手品だとすれば、まさに久生十蘭の短篇こそ、それだという気がする。作者は作品のかげに完全に隠れてしまって、ついに最後まで、ちらりとも姿を現わさず、私たちの目を奪うのは、凝りに凝った、あまりにも凝りに凝った作者の小説技巧のみなのだ[1]」と、十蘭の小説技巧を高く称賛している。また、江口雄輔も十蘭文学について、「読者側の切り込み方に応じて変幻自在の貌を見せる[2]」と高く評価している。

しかし、中井英夫も述べているように、十蘭は絶妙な文体を駆使して二十五年、小説の幻術師と称賛されながらも、なお一篇の久生十蘭論すら生まれなかったので、この作家の輝きの本質が解明されたとは言い難い[3]。要するに、久生十蘭は小説の幻術師だという評価にとどまっており、作品についてのさらなる研究はまだ手薄なのである。そこで、十蘭研究を進めていくためにはさらに斬新な視点からテクスト分析をして新たな十蘭論を提示する必要が出てくることになるであろう。

さて、十蘭の『母子像』は一九五五年に発表された作品であり、サイパン島玉砕の生き残りの親子を題材にしている。そのあらすじ

---

1 澁澤龍彦(1994)「スタイリスト・十蘭」『澁澤龍彦全集』「第十巻」河出書房新社、223頁。

2 江口雄輔（1989）「久生十蘭主要作品巡覧」『ユリイカ』1989年6月号、250頁。

3 中井英夫（2015）「戦争と久生十蘭」『久生十蘭　評する言葉も失う最高の作家』河出書房新社、162頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

はつぎのとおりである。第二次世界大戦中、サイパン島がアメリカ軍に所有される直前に、和泉太郎の母親はアメリカ軍に虐殺されることを恐れ、自らの手で太郎の首を麻紐で締める。その後、太郎は教師たちの人工呼吸で息を吹き返し、ハワイを経て日本へ連れて来られる。太郎は、母親が売春していたことを偶然に知り、「美しい」と思い続けてきた彼の母親像が一瞬にして崩壊する。十六歳になった太郎は、それまでずっと優等生であった。しかし、普段はおとなしい太郎は、夜になるとセーラー服を着て銀座のバーに花売りとして出入りしたり、ポン引きのように朝鮮戦争帰りの軍人をバーに案内したりしていた。物語は、太郎が素行不良で検挙されたため、中学部の担任教諭が警察署から呼び出しを受けたところから始まっている。物語の最後に、死を求め続けた太郎は警官によって銃殺される。

この小説は、高度な技巧で仕組まれた短編だと言える。しかし、当時発表の文芸誌による創作合評では、加藤周一と福永武彦は構成の巧妙さがむしろ機械的印象を与えると批判していた[4]。これも前述した、創作技法を操る十蘭作品の問題である。『母子像』の先行研究に関しては、須田千里（1993）と開信介（2011）の論考がみられる。後者は、第二回世界短編小説コンクールで第一席に入選した『母子像』の英訳問題を取り上げたものである[5]。一方、須田千里は、母親は太郎にとって聖なる恋の対象であったと述べ、太郎の「阿闍世コンプレックス」を指摘している[6]。潔癖な少年太郎が母を汚い豚に喩えるのは、母の「女」の部分を見て幻滅し、死のうとしたからだという。

しかし、性的な要素のほかに、太郎と母親の関係はないのだろうか。また、作品世界に内包されるメッセージとは何か。本稿では、

4 荒正人、福永武彦、加藤周一（1955）「創作合評」『群像』第十巻第九号、206-208頁。

5 開信介（2011）「第二回世界短編小説コンクールにおける久生十蘭『母子像』翻訳の問題」『国語国文』80、1-20頁。

6 須田千里（1993）「『母子像』の内と外:久生十蘭論II」『光華日本文学』1、89-106頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

創作技巧を含めた、作品の「魂」を探りたい。主人公太郎の戦争の記憶はいかに再現されているのか。ここでは、物語で再現される戦争記憶の傷痕および生と死にかかわる戦争の記憶がいかに継承されたかを探求したい。

二、多層化される物語の構造

十蘭の『母子像』は、語りの技巧がすぐれ、筋道の展開と構成が巧みに構築されている。中井英夫によれば、「代表作とされている『母子像』は、わずか二十枚ばかりの短編だが、彼は初めこれを百枚ほどに書きあげておき、それから煮詰めに煮詰め、削りに削ってあの形に仕上げたという」とある。筋道は簡略であるが、展開が速く、和泉太郎がいかなる遭遇を経て死に至ったかを、全編を吟味しながら読む必要がある。要するに読者が工夫して年の計算や筋の前後の順序を把握することにより、始めて全体像を掴むことができるのであろう。

たとえば和泉太郎の出生年について、語り手は「和泉太郎、十六年二ヶ月、出生地はサイパン島……聖ジョセフ学院中学部一年B組、（中略）父はサイパン支庁の気象技師で、昭和十五年の死亡」（『定本久生十蘭全集』第九巻、国書刊行会、2011年6月、146頁、以下同）という。また、別の話題の枠組みで、「父は本人の四歳の時に死んでをります」（147頁）という情報を読者に与える。となると和泉太郎が、昭和十一年（1936）の生まれなのだということを、読者は自ら計算しなければならない。

それから筋道に関しても、時系列にそって事件を語っているわけではないため、教諭と警官の対話から、読者はあらゆる情報を総合的に整理しながら、筋の展開を把握する必要がある。実際の和泉太郎の経歴は、つぎのようになる。語りの現在は昭和二十七年（1952）で、太郎は十六歳で中学一年生である。彼は終戦後一九四五年十月にハワイに移され、六年間をグレード・スクール（日本の小学校にあたる）で過ごした。物語の最初に、「今年の二十七年の春、学院の

臺灣大學學術期刊資料庫

中学部に転入してきました」（147頁）とあることから、今年から日本に戻ってきたことになっている。一方、母親の行動については語られていないが、母親は終戦後サイパンから直接日本に戻ったと推測できる。太郎は「母が銀座でバアをやつてゐることは、ホノルルで聞いて知つてゐた。東京に着いた晩、すぐその店をつきとめた」（150頁）とあるからである。このように、本作は、いつどこで登場人物がなにをしたかを、読者が何回も読み返して推理しながら、混乱した情報を修整する必要のある、構成の密度の高い小説となっているのである。

のみならず、語り手は読み手を惑わせて虚偽を信じさせる。和泉太郎に関しては、物語の最初で、警官によって「父はサイパン支庁の気象技師で、昭和十五年の死亡。母は南洋興発会社の内務勤務。戦災による認定死亡、となつてをります……」（146頁、下線引用者）と紹介されている。読者はこの段落から、太郎の母親が亡くなっているとミスリードされてしまう。しかし、物語の最後まで読めば、和泉太郎の母親は生きていたことがわかる。しかも、ここで母親は「南洋興発会社の内務勤務」と提示されたので、会社員だと考えがちだが、実際には慰安所を「一人で切りまはして」（147頁）いたのだという。久生十蘭はミステリー風の語りをとおして、『母子像』を推理小説のように見事に仕上げたのだと言えよう。

一方、婦人警官と教諭の対話も注目される。物語の冒頭、太郎が素行不良で検挙されたため、聖ジョセフ学院中学部の担任教諭が警察署から呼び出しを受ける。まず年配の司法主任が「臨時に応援にきてもらつた」婦人警官を連れて調室に入り、「事件を大きくしようといふのではありません」（146頁）と語る。また、婦人警官は「筋が通つてゐればすむことなんです」と、書類作成を手早く済ませようとする。しかも、教諭を呼び出したのは、太郎の「家庭関係と性向の概略をうかがつて、それを参考にして適当な理由をこしらへてしまはうといふので」（146頁）と語る婦人警官の言葉から、ありがちな少年の非行事件が想像される。しかし、司法主任の言葉とは正

臺灣大學學術期刊資料庫

反対に、最後に太郎が銃殺されるという大事件に展開する。そのため、読者には物語の意外性と予想外の余韻が残る。

婦人警官は、太郎の非行の理由を探るため、教諭にさまざまな質問をする。まず、母親が将校慰安所を切りまわしていた事実が教諭によって語られ、婦人警官が「慰安所の生活といふと、猥雑なものなのでせうが、本人はさういふ環境で生長期をすごしたのですね」（147頁）と応答する。ここで読者は慰安所による「悪い影響」を脳裏に浮かべる。ところが、母親が太郎を「独領時代からゐるカナカ人の宣教師に預けつぱなしにしてあ」ったという教諭の説明によって、読者の予想は裏切られる。しかし、婦人警官は、太郎が宣教師に預けられていたことを聞いてから「悪い影響はたいして受けてゐないとおつしやるのですね」（147頁）と暗示するように誘導尋問する。

そして、婦人警官が一座に太郎の一連の非行を述べたのち、「本人には、なにか煩悶があるのではないでせうか。たとへば、過去の思ひ出に不快なものがあつて、無意識に破壊を試みてゐるといつた……」（148頁）と教諭に尋ねる。それに答えて教諭はサイパン陥落直前に太郎が母親に殺されかけたエピソードを述べる。こうして婦人警官の誘導尋問をとおして、太郎の悲惨な過去が明かされていくのである。

読者はここで太郎の非行の原因が「不快な過去」によるものであろうと判断する。しかし、直後に太郎の回想シーンが挿入され、母と暮らす愉快さが語られている。太郎にとっては、母親に手をかけられたことすら不快なものではなかったのである。実際、太郎が不快に感じたのは、日本に来てからの、ごく最近の出来事であった。また、物語では物事の表裏が同時に語られることが多い。たとえば、太郎の母親は「非常な美人で……すこし美しすぎるので、女性間の評判はよくなかつた」と。太郎に関して「バイブル・クラスの秀才といつたところで、日常を見てゐると子供にしては窮屈すぎるやう」（147 頁）だという。このように、語りと正反対な筋の展開を緻密

臺灣大學學術期刊資料庫

に交錯することで、情報が錯綜し筋道の起伏が激しく、物語の意外性を見事に演出している小説になっているのではないか。物語の構造は単に二重性が潜んでいるだけでなく、複雑な要素が取り入れられた、多層化された構成になっていると言えよう。

三、国から放置される戦災孤児と届かぬ声

物語の舞台であるサイパン島は、日本の民間人が多く居住していた。昭和十九年（1944）六月から七月に、アメリカ軍はマリアナ諸島攻略を開始し、南洋群島の中心地であるサイパン島に上陸し、日本軍と猛烈な戦闘を繰り返した。日本軍は敗北のため、日本の大本営はサイパン島を放棄した。救援の望みを絶たれた日本軍は徹底抗戦したが、食糧も水も足りない状態で、最終的に全滅、玉砕した。そして、多くの民間人はアメリカの捕虜になるのを拒み、断崖から海に飛び込むなど自決したという。

『母子像』では、冒頭から「進駐軍、厚木キャンプの近くにある聖ジョセフ学院中学部の初年級の担任教諭が､受持の生徒のことで､地区の警察署から呼出しを受けた」（146頁）と、アメリカ進駐軍のことに言及している。それは､終戦後､連合国軍が日本に進駐して、一九五二年四月のサンフランシスコ講和条約発効により、日本が主権を回復するまで日本を占領していた、という歴史的背景をふまえたものである。進駐軍により、日本国民はアメリカ文化との関係がいっそう深くなった。

しかし、戦争が終わっても、社会に残る見えない戦場は簡単に消え去らない。戦争の多くの場合は、公共施設や道路、水道などの生活や社会活動に必要な社会基盤を壊してしまう。しかし、これらの施設と社会環境は、子どもたちが成長するために必要な物理的で社会的な条件なので、子どもへの影響が大きい[7]。和泉太郎は四歳からカナカ人の宣教師に預けられていた。つまり、幼いころからひとり

[7] 市川ひろみ（2009）「戦争後の子ども」『国際関係の中の子ども』御茶の水書房、122-134 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

の世界に浸っていたと言える。太郎と世間の関わりが遮断されていることは、彼の進級が遅いことからも理解できる。

婦人警官は言う。「十六年二ヶ月で中学一年といふのは、どういふわけなのでせう。学齢にくらべて、進級が遅れてゐるやうです」（146頁）と。担任の教諭は、太郎がハワイで六年間日本の小学校にあたる学校にいて、今年の春に中学部に転入してきたのだと説明し、「学齢からいへば、三年級に入れるところですが、日本語の教程が足りないものですから」（147頁）と補足する。

ここではとりわけ「日本語の教程が足りない」点に着目したい。要するに、太郎は言語能力が足りないため、日本語に困っている、ということである。言語能力が足りないということは、世の中とうまくコミュニケーションできないということでもあろう。「あの齢の少年なら、誰でも知つてゐるようなことすら、ほとんど知りません」（147頁）と教諭が語っている。世の人とつながっていないのみならず、この世から見捨てられた孤児にもなっている。太郎は、世に溶け込めない浮遊児になっていたのだと言えよう。

家族や慣れ親しんだ環境を失った子どもには、不安、悪夢、発達障害、成長の遅れなどの症状が現われる。そして行動が暴力的になったり、鬱状態になったりすることもあるという[8]。物語のなかでは、誰も太郎の声を聞いていない。警察署での婦人警官の訊問に対しては、「石みたいに黙りこんでゐ」（146頁）て、太郎が話すことはなかった。後半、保護室から刑事部屋へ連れられて、ヨハネというあだ名の教師と会話する場面がある。そこでも彼はヨハネを相手にしなかった。花売りをしていたのだろうというヨハネの質問に対して、太郎は「当たり」と「心のなかでつぶやいた」。そしてヨハネが、花売りが学費を稼ぐための行為だと推測したとき、「「外れ」……と太郎はまたつぶやいた」（150頁）。

つぎに、ヨハネは「お前は、毎土曜の午後、朝鮮から輸送機で着

8 同注 7、123 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

くひとを、タクシーで東京へ連れて行つた。アルバイトとしては金になるのだらうが、お前の英語が、そんな下劣な仕事に使はれてゐたのかと思ふと、先生は情けなくなる」と続ける。それに対して、太郎は「「それは誤解」……アルバイトなんかしてゐたんぢやない」（150頁）と心のなかで反論する。さらに、ヨハネは、「果してお前は堕落した。酔つぱらつて相模線のレールの上を歩いてゐて、電車に轢かれかかつたさうだな」（151頁）と続く。太郎は「半当たり」とまた心のなかで弁解している。

太郎と先生の対話は平行線をたどり、交錯するところがない。ヨハネが得た情報とそれを元にした推測は、太郎の思考と大きく齟齬をきたしている。ヨハネは、そして世間の人々は、太郎を誤解していたのである。しかし、太郎はそれらの誤解に対して、実際に口を出して反論しようとはしない。なぜなら、太郎はこの時点でこの世とはすでに離れていたからだと言えよう。

母親への美しい記憶の崩壊は、最後に一種の暴力の記憶になっている。それは、突然、太郎の世界のすべてを奪いさる。彼にとって、人間が人間として生きるということを可能ならしめる諸条件が奪われたのである。そうした暴力の記憶を遮断し抹殺しようとする太郎にとって、ヨハネの質問はただの無意味な音のつらなりにすぎず、声に出して反論するまでのものではなかったのであろう。その結果、太郎の真実の声は、世間には届かず、終戦後の混乱のなかに消えていく。結局、太郎は国に置き去りにされたのではないだろうか。なぜ、太郎は国から放置されたと言えるのか。

四、母子関係というメタファー

戦争で親が不在であったり、死別してしまったりした場合、その子どもを取り巻く環境は大きく変わり、子どもにとっては成長のためのモデルを失うこともあると考えられる。和泉太郎の場合は、四歳で父と死別し、その後母親に殺害されそうになったことがある。彼は親のいない世帯になるので、生命力がもっとも弱いと理解でき

臺灣大學學術期刊資料庫

る。

和泉太郎はサイパン最後の日のことをつぎのように思い出す。「一日ぢゆう母のそばにゐて、あれこれと奉仕できるのが、うれしくてたまらない」。「ある朝、母の顔を見て、この世に、こんな美しいひとがゐるものだらうかと考へた」。そして「母の命令ならどんなことだつてやる」、「危険だとも恐ろしいとも思つたことがない」(149頁)と異常に母親に憧れている。

教諭の話しによると、サイパンの民間人が「親子で手榴弾を投げあつたり、手をつないで断崖から飛んだり、いろいろな方法で自決しましたが、さういふのは、親子の死体が密着してゐるのが普通で、子供の死体だけが、草むらにころがつてゐるやうなのは、ほかにはひとつもありませんでした」(148頁)という。つまり、太郎の死体は孤独だったのである。しかし、太郎から見れば母親に殺されそうになったとき、「首を締められて、一人で死ぬと考へたこともなかつたが、あきらめて、母の気にいるやうに、うれしさうに身体をはづませながら、けはしい崖の斜面をのぼつて行つた……」(150頁)とあるように、喜んで死に赴く。

太郎はなお警察署の保護室で母親への憧憬を思い浮かべ、「低い声で暗誦をはじめた」。「旅人よ……行きて、ラケダイモンに告げよ……王の命に従ひて……我等、ここに眠ると」(149頁)と。物語の終わりの「死刑にしてください」「死刑にしてくれ、死刑にしてくれ」(152頁)という叫び声を除くと、この低吟は太郎が物語の全編で唯一「発声」したものである。サイパンで最後の日が近づくと、母親が太郎に「ひと区切りづつ口移しに教へながら、いくども復唱させた」(149頁)。母は自決させようとする太郎を、スパルタ人の例を提示して勇気付けたのである。

一方、第二次世界大戦中、日本では「宣戦の大詔勅」を校長先生は宣詔の奉読をして、子どもたちは「私たちも一生懸命やろう」という決心をした(1942年)という。また、雑誌『主婦の友』(1944年10月)に「父出陣、宮城を拝す父子」の箇所につぎの会話が描かれ

臺灣大學學術期刊資料庫

ている。「立派な兵隊さんになるんだよ」「はい」「兄ちゃんは荒鷲になるのね」「うん。飛行機に乗って、アメリカをやっつけるんだ」と。『少年倶楽部　勝ち抜け大東亜戦号』(1943年12月）にも「先生しっかり」という挿絵が載せられている。そこで先生と生徒の会話はつぎのように展開される。「先生、憎いアメリカ軍をやっつけてください」「うん、やるぞ。お前たちも、すぐ後ろから来るんだな」「僕らも行こう」「生徒たちは、心の中に、固く固く誓ったのであった」と。さらに「昭和の子ども」という挿絵に「昭和の子どもは皆強い子どもです。忠義の心を強く持ち、体を丈夫に鍛え、今に大きくなったら、皆そろって兵隊さんになるのです」(「昭和の光　決戦下の幼児の心の糧」1944年6月）と[9]。こうして、戦時メディアの内容はますます軍国色を濃厚にして、子どもたちへの洗脳を進めていた。さらに、戦争中子どもは暴力を受ける対象となるだけでなく、子どもが少年兵として暴力を行使することを強いられている[10]。

『母子像』では、母はつぎのように太郎に徹底抗戦をそそのかす。「スパルタの兵隊が、何百倍といふペルシャ軍隊とテルモピレーといふところで戦争をして、一人残らず戦死しました。(中略）スパルタ人は偉いわね。あなただつて、負けちやあゐられないでせう」(149頁）と。スパルタ人が少人数で大勢の敵軍を攻撃する状況は、サイパン島で少数の日本軍が大勢のアメリカ軍に抗戦したありさまと類似している。そして、日本の少年兵が日本国に精神的に支配されていくように、母親の言葉は彼のこころに強く刻印された。したがって、太郎は死を恐れなかった。

太郎がハワイから日本に戻ってきたとき、早速母親のバーに通った。終戦後の混乱期に、母が稼ぎのために女を売るようになっていたことを後日知り、太郎は死を求めたのである。「母なんてもんぢやない、ただの女だ」「死にでもするほか、汚ないものを身体から追ひ

9　久保井規夫（2006)『絵で読む大日本帝国の子どもたち』つげ書房新社、113-116頁。
10　山中恒（1990)『[図説]戦争の中の子どもたち』河出書房新社。

臺灣大學學術期刊資料庫

だしてやることができない」と絶望する。母親の正体がわかったその夜、「ロッカーから母の写真や古い手紙をとりだすと、時間をかけてきれぎれにひき裂き、塵とりですくひとつて炊事場の汚水溜へ捨てた」（151頁）という。「時間をかけてきれぎれにひき裂」くという行為から、太郎の母親に対する絶望の深淵がうかがわれる。そして、その「記憶」を汚水溜に捨てたという設定からも、太郎の母親への「汚い」記憶と関わっている。こうして太郎は、形の見えるすべての関連するもの一切を自分の手で排除したのである。

では、太郎はかつて殺害されかけたときでさえ、母親に幻滅することはなかったにもかかわらず、なぜ彼女の売春行為を知ったときには徹底的に絶望したのか。物語では母親の心境がほとんど語られていない。母親はサイパンでかつて南洋興発会社の内務勤務をしていた。南洋興発会社は、一九二〇年代に東洋拓殖株式会社と実業家松江春次が中心になってサイパン島に設立した製糖工場である。主な事業は製糖事業であったが、三〇年代から事業を水産業、農園業から鉱業、交通運輸業などに至るまで拡張し、南洋における最大の企業となった[11]。南洋群島に移住した日本人の多くが南洋興発に従事した。久生十蘭は、母親の仕事の設定について、こうした歴史的背景をふまえている。

しかし、その後母親は慰安所の元締めから売春婦に変わり、戦後は商売女として描かれている。母親は「島ではクィーン的な存在でした」（147頁）と語られるように、彼女の役目は、被害者というより、国家のために戦う男に感謝と畏敬をもって奉仕する女という配置にはあてはまる。終戦後の売春は、一般的に戦勝国の男が敗戦国の女に対して行使する性暴力で、戦勝国の兵士の「特権」であるが、『母子像』ではそのような構図になっていない。物語では、母親の名前さえない。一人の日本人女性が終戦後も、生計のためアメリカ軍を相手に身体を売り、やむを得ず「自発的な売春婦」になってし

[11] 門田隆将（2011）『太平洋戦争最後の証言』小学館、126頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

まう。こうして、戦勝国の男性性を誇示することによって、負けた国の無力感を強調するようになっているのである。

顔馴染みの運転手が母親を皮肉っているように、母親は商売女なので、被害者ということは言えないようになっている。しかし、売春婦という商行為からして、戦争に負けてからもアメリカ軍に「奉仕」し続ける、日本人の虚しさと悲嘆を物語っているのではないか。そのことは、太郎から見れば存在する生命より汚らしいことであろう。しかも、太郎の挫折感はそれだけでない。自分もポン引きをして母親を手伝っていたことであろう。太郎の場合は、暴力の駆使を強いられるわけではないが、広い意味では少年兵の役割を果たしていたのではないだろうか。汚れた母親の血をひく自分も生命が汚れており、その汚なさを身体から追いだしてやることができない。

このように、広い意味では、母親と太郎の母子関係は、すなわち日本政府と軍隊との関係として重ねられているのではないだろうか。太郎の母親への憧憬は、少国民が抱いた日本政府への愛国心と忠義心として表象されている。太郎はサイパンでの記憶をつぎのように想起する。「母の命令なら、どんなことだつてやる。磯の湧き水は、けはしい崖の斜面を百尺も降りたところにあつて、空の水筒を運んで行くだけでも、クラクラと眼が眩む。崖の上に敵がゐれば容赦なく狙撃ちをされるのだが、危険だとも恐ろしいとも思つたことがない」（149頁）というくだりからは、国家のためならいつでも戦える少年兵の姿が浮かび上がってくる。そして、母親が太郎を絞め殺すことは、サイパン島の玉砕と構図が似通うのではないだろうか。母親の表象する日本が、終戦後もアメリカに「尽くす」、という日本人のもどかしさを、十蘭は『母子像』での母子関係をとおして批評しているのではないだろうか。

では、久生十蘭にとっては、この戦争はどのようなものだったのか。十蘭は昭和十八年（1943）二月に海軍報道班員としてジャワなどに派遣され、翌年帰国する。彼には未刊の「従軍日記」がある。

臺灣大學學術期刊資料庫

橋本治はその日記を「昔の大人の普通の日記」と解説している[12]。というのは、十蘭が「昔の普通の日本人」の一人でもあったので、戦争に対しては「イエスでもなく、ノーでもないのだろう」と、橋本は考えたからである。久生十蘭は過剰に愛国的でもなければ、アメリカ憎しというものでもないという。

しかし、戦後十蘭の戦争観はより鮮明なものになっている。『母子像』で見たように、たとえば戦後の太郎は社会から排除されたり、母親の「汚れた」血縁と結びつけられたりしている。こうした細部の描写を借りて、戦後日米関係の葛藤、とりわけ日本のアメリカに対する憤懣、無力感を暗に批判しているのではないか。

五、継承される戦争記憶

和泉太郎は警察署の保護室で薄暗い小部屋に座って、「巣箱の穴のやうな小さな窓から空を見あげながら、サイパンの最後の日のことを、うつらうつらと思ひうかべてゐた」。注目すべきなのはつぎの描写である。「薄暗い部屋のようすが、湿気が、小さく切りとられた空の色が、おしつけられたやうな静けさが、熱の出さうな身体の疲れが、洞窟にゐたときの感じとよく似てゐる。洞窟の天井に苔の花が咲き、岩肌についた鳥の糞が点々と白くなつてゐた。洞窟の口は西にむいてあいてゐるので、昼すぎまでじめじめと薄暗く、夕方になると急に陽がさしこんできて、奥の方に隠れてゐる男や女の顔を照らしだした」（148頁、下線引用者）という。

太郎は保護室の様子を、洞窟の「薄暗」さと「湿気」、「小さく切りとられた空の色」、「おしつけられたやうな静けさ」、「熱の出さうな身体の疲れが」と重ねて考えている。この時点の太郎はわずか九歳である。洞窟とは、防空壕のメタファー表現である。少年太郎の戦争記憶に湿気、抑圧される静かさと身体の疲労が鮮明に刻まれている。換言すれば、太郎にとって、警察署の保護室はあたかもサイ

[12] 久生十蘭（2012）『久生十蘭「従軍日記」』講談社。

臺灣大學學術期刊資料庫

パンの戦地のようである。警察署はサイパンの戦地と結びついていることから、ひいてはここの警察署は、戦争中の軍隊そして軍営と重層化されていると理解できる。すなわち、太郎のサイパンでの戦場記憶は、日本に戻ってから警察署という「トポス」にも継続されているのである。

一方、太郎の防空壕の記憶に着目すれば、それは非常にやさしい言葉で沈静に描かれている。爆弾が落ちたらどうなるのかを考えれば、少年太郎は泣き叫び続けることはない。ただ受動的に洞窟の湿気と薄暗さを生き抜きながら、「熱の出さうな身体の疲れ」と「おしつけられたやうな静けさ」を耐え忍んでいる。「小さく切りとられた空の色」は彼のほのかな光である。太郎は沈黙のまま、戦争の非道に抵抗しているのではないか。

そして、太郎は保護室で警官の腰の拳銃をながめ、「あのピストルとおなじピストルだ」（150頁）と考える。それは洞窟にいるとき、海軍の少尉が輪胴のついた拳銃を貸してくれたときの記憶が喚起されたからである。ここからもわかるように、警察署と戦争の軍地とを重ね合わせて語られている。戦地の洞窟は警察署に取り換えられており、戦地の軍人と東京の警官と重ね合わせられている。このように太郎の視点から言えば、物語の舞台の警察署は、すなわち戦地の再現なのではないだろうか。

では、太郎の心の傷をいやすためには何が必要か。「死にでもするほか、汚ないものを身体から追ひだしてやることができない」と彼が語ったように、母親の血を身体から排除するのに、死しかない。彼が最終に思いついたのは死刑である。太郎によれば、死刑とは「なにかうんと悪いことをすると、だまつてゐても政府が始末をつけてくれる……」（152頁）という。太郎はかつて戦争で残酷な被害を受けた子どもである。太郎は戦争のトラウマをいやすために死刑を選ぶ。彼にとっての死刑とは、日本政府が人間の後始末をするものである。死刑なら、母親からもたらす戦争の「悪」を除却することができると彼は考えたのであろう。

臺灣人學學術期刊資料庫

太郎は戦争によって運命が翻弄され、最後に警官に銃殺される。「拳銃」「ピストル」は、太郎の戦争記憶が継承される媒体であり、洞窟での戦争記憶と保護室での爆発的な行動とが結びついたのである。物語の最後に「太郎は壁に凭れて長い溜息をついた。だしぬけに眼から涙が溢れだした」（152頁）という。ここで太郎の涙は、母親のイメージ問題だけではない。そのような出自を持つ戦災孤児の重い悲しみも物語っている。

のみならず、ピストルは戦火ともつながっている。広い意味で言えば、この鉄棒の発射の一撃は、戦争によるアメリカの日本に対する暴虐だと考えられるのではないか。つまり、死刑、拳銃とは政府、ひいては軍隊、すなわち戦争に連想するものである。太郎を撃ち殺した警官の発砲は、第二次世界大戦中、アメリカ軍の日本国への致命的な一撃に当たるものだと言えよう。しかし、アメリカ軍の銃はすなわち、日本の警察の銃と同じように、この一撃は単にアメリカ軍の日本に対する暴力であるというだけでなく、それは日本政府が国民に与えた致命的な危害でもあると考えられよう。

物語の最後では、太郎の長い溜息と涙は、彼の記憶のそこに沈澱している戦争時の「身体の疲れ」と、声を飲み込まざるを得ない疎外感と孤独さから来たものであろう。アメリカ軍の銃が日本の警察の銃と重層化されるということは、両方とも戦火のメタファーなのである。太郎の声は両国の戦火のなかから遮断されていた。彼の悲しみは誰にも聞かれることはなかった。戦争を象徴する「拳銃」「ピストル」は、彼の戦地での記憶から終戦後の警察へと引き継がれていく。「拳銃」「ピストル」によって、彼の戦争の記憶と悲痛が継承されているのである。

六、おわりに——生きる場所を求めて

『母子像』では、母親と太郎の母子関係は、すなわち日本政府と軍隊との関係として表象された。太郎は戦争で玉砕した日本人および日本軍の体現なのだと言えよう。のみならず、アメリカ軍の銃と

臺灣大學學術期刊資料庫

日本警察の銃は、戦火のメタファーとして反復して多重化されている。

そして、作品世界に内包される太郎の戦争のトラウマは、母親に対するイメージの混乱と倫理的な葛藤によるものだと言える。ひいては、太郎をとおして表象化される、日本兵による戦争のトラウマの現われでもあろう。また、太郎が戦争のトラウマをいやすために選んだ死刑は、結局彼が戦地で静かに抵抗していた戦争暴力の反復なのである。このように、『母子像』は巧妙な創作手法のみならず、多層的で意味が深い作品となっているのである。

【付記】本稿は107年度科技部専題研究計画による成果の一部である。審査委員たちから貴重なご意見をいただいたことに、心より厚く御礼を申し上げます。

【参考文献】

荒正人、福永武彦、加藤周一（1955）「創作合評」『群像』第十巻第九号、206-208頁

市川ひろみ（2009）「戦争後の子ども」『国際関係の中の子ども』御茶の水書房、122-134頁

江口雄輔（1989）「久生十蘭主要作品巡覧」『ユリイカ』1989年6月号、250頁

門田隆将（2011）『太平洋戦争最後の証言』小学館、123-166頁

久保井規夫（2006）『絵で読む大日本帝国の子どもたち』つげ書房新社、113-116頁

澁澤龍彦(1994)「スタイリスト・十蘭」『澁澤龍彦全集』「第十巻」河出書房新社、223頁

須田千里（1993）「『母子像』の内と外:久生十蘭論II」『光華日本文学』1、89-106頁。

中井英夫（2015）「戦争と久生十蘭」『久生十蘭　評する言葉も失う

臺灣大學學術期刊資料庫

最高の作家』河出書房新社、162頁
久生十蘭（2012）『久生十蘭「従軍日記」』講談社
開信介（2011）「第二回世界短編小説コンクールにおける久生十蘭『母子像』翻訳の問題」『国語国文』80、1-20頁。
山中恒（1990）『[図説]戦争の中の子どもたち』河出書房新社

臺灣大學學術期刊資料庫